第２章　施策の状況

基本目標１　確かな学力の定着

１　主体的・対話的で深い学びの実現

２　ＩＣＴ活用による情報活用能力の育成

３　言語活動の充実による読解力・表現力の育成

４　筋道立てて説明できる論理的思考力の育成

５　英語コミュニケーション能力の育成

６　就学前教育の充実

子どもたちがこれからの複雑で変化の激しい時代を生き抜くためには、知識や技能の定着とともに、思考力、判断力、表現力をバランスよく育成することや言語能力、問題解決能力、情報活用能力など汎用的な資質・能力を育成する必要があります。

いかに社会が変化しようとも、自ら課題を見つけ、考え、主体的に判断・行動し、よりよく問題を解決できるよう、ＩＣＴを効果的に活用しながら、個に応じた指導や対話的な学びをこれまで以上に進め、確かな学力の定着を図ります。

1　主体的・対話的で深い学びの実現

＜めざす子どもの姿＞
問題や変化に対して仲間とともに能動的に学び続ける子ども

子どもたちが学習内容を深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるように、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めます。

授業改善にあたっては、これまでも本市が重点的に取り組んできた「問題解決能力向上のための授業づくり（以下：四日市モデル※１）」を基盤にするとともに、教科等の学習でＩＣＴを効果的に活用したり、言語活動を充実したりすることで、「個別最適な学び※２」、「協働的な学び」を目指します。

※１　本市が考える「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の１つ。
①問題の理解、②問題の特徴づけと表現、③問題の解決、④解決方法の共有、⑤問題の熟考と発展という５つの学習プロセスを大切にしている。

※２　教員が個に応じた学習課題や学習活動を提供することによって、児童生徒一人一人が自分自身にとって最適な学習となるように調整する学びの総称

◆指標とその評価

指標	基準値 R１	R４	R５	R６	R７	R８	目標値	R４評価
「全国学力・学習状況調査」における各教科の平均正答率の平均値	小６ 98.9 中３ 102.5	小６ 100.8 中３ 100.5					小６ 102 中３ 103	↗ ↘

【評価】

小中学校ともに全国の正答率よりも上回っている。四日市モデルを基盤とした授業改善が浸透しつつあり、授業の中で「つけたい力」を意識した授業づくりが進められていると思われる。

◆具体的な施策の現状

１．各教科等における資質・能力を育む授業づくりの推進

実施状況	実績・成果
○子どもが問題意識や目的意識を大切にし、各教科の見方・考え方※３を働かせながら、確かな資質・能力を身に付けることができる授業づくり ○全国学力・学習状況調査やその結果を分析し、本市の課題等に合わせた授業改善に向けての活動	・「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック３」の作成 ・全国学力・学習状況調査の分析冊子の作成 ・四日市市における学力向上の全市的な取組の作成

◆評価

四日市モデルをより推進していくために、授業づくりのポイントをまとめた「授業づくりガイドブック３」を作成した。

また、令和４年度の全国学力・学習状況調査の結果分析を行い、そこから全市的な取組と

して、子どもたちに必要な力をつけるための授業改善や主体的・探究的な学習習慣の必要性などを冊子として示すことができた。

◆今後の方向性

【継続】授業づくりにおいて、大切な３つのポイントとして、「見方・考え方を働かせる子どもの姿」「つけたい力」「ふり返り」がある。これらのポイントについて、授業づくりガイドブック３を手がかりとした授業改善が行われるよう、校内研修等で指導助言する。

また、全国学力・学習状況調査の問題を分析し、学校が学力向上に向けて調査後の早い段階から取り組めるように、授業における大切なポイントについて具体的な授業例を示していく。

※３　各教科等において、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方。

２．学習の基盤となる資質・能力の育成

実施状況	実績・成果
○問題発見・解決能力や情報活用能力が育つ取組の啓発 ○各教科等において言語活動を充実させる取組の推進	・各学校において、実態等に合わせたカリキュラム・マネジメント※４を作成

◆評価

各学校において、学校の教育目標を実現するために児童生徒の発達段階を考慮し、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力の育成に向けて、教育課程を編成することができた。教育課程の編成において、地域の現状も考慮していく必要がある。

◆今後の方向性

【継続】児童生徒の発達段階を考慮した教育課程を編成するだけでなく、地域の現状も踏まえて、意図的・計画的・組織的に作成された各校のカリキュラムを検証していくことが必要である。

※４　①児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと。
②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。
③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

３．ＩＣＴ機器を活用した家庭学習と授業の連携

実施状況	実績・成果
○ＩＣＴ機器の活用 ○子ども自らが学習を調整できるタブレットを活用した学習環境の整備	・四日市っ子「タブレットを活用した家庭学習」の作成

◆評価

デジタル教材「学んで E-net!（中学生のみ）」「ドリルパーク」、四日市市学習ポータルサイト「こにゅうどうくん学びの部屋」など、子どもが「調べたい」「確かめてみたい」「やってみたい」など、興味関心をもったことを解決できる学習環境を整備した。この学習環境を多くの子どもたちが活用していくように、授業とつながりをもたせていく必要がある。

◆今後の方向性

【継続】カリキュラム・マネジメントの視点から学校教育にかかわる様々な取組の中で、ＩＣＴを位置付け、学習に必要な情報を子どもたちが自ら選択できるよう学習環境の充実に向

けて推進する。学びの保障オンライン学習システム（MEXCBT：メクビット）※5を活用した家庭学習の方法等について発信する。

※５　児童生徒がコンピュータ端末を用いてオンラインで学習・アセスメントが可能なＣＢＴ（Computer Based Testing）システムのこと。

2　ＩＣＴ活用による情報活用能力の育成

＜めざす子どもの姿＞
情報や情報技術を適切かつ効果的に活用して主体的に学ぶことができる子ども

世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力を育成します。
そのために、情報手段となるコンピュータの基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル等に関する資質・能力等の向上を図ります。

◆指標とその評価

指標	基準値 Ｒ１	Ｒ４※1	Ｒ５	Ｒ６	Ｒ７	Ｒ８	目標値	Ｒ４ 評価
ほぼ毎日、コンピュータなどのＩＣＴ機器を他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している児童生徒の割合	5.7%（参考値）	調べる場面 13.1% 意見交換場面 6.5%					100%	↗

※１　令和４年度全国学力・学習状況調査の学校質問紙において、設問の内容が調べる場面と意見を交換する場面にわかれたため、別々の数値を達成状況とした。

【評価】

教育支援課による出前研修や校長への学校訪問支援等により、週３日以上調べる場面に端末を活用した児童生徒の割合は 40.5%、意見交換に活用した児童生徒の割合は 22.7%と増加したが、ほぼ毎日となると若干の増加にとどまった。

◆具体的な施策の現状

１．情報活用能力を育成するＩＣＴを活用した教育活動の充実

実施状況	実績・成果
ＩＣＴ活用の推進のための研修の実施 ○授業支援ソフトの操作、クラウドサービスの実践事例の紹介・体験など学校の要望に合わせた研修	・計 11 回実施 その他にもミニ研修として実施したものが複数あり
ＧＩＧＡスクール構想の理解を高めるための学校訪問 ○タブレット端末の活用について理解を深めるとともに、今後のＩＣＴ活用戦略についての相談・助言を実施	・全小学校（37 校）で１～２回実施
学校におけるＩＣＴ学習環境の充実 ○教員向けタブレット端末を追加配備 ○学習系インターネット通信の高速化、リモートサポート環境を整備	＜タブレット端末＞ ・授業を受け持つ全教員へ配備 ＜ネットワーク＞ ・全小中学校を含む 61 拠点で実施

◆評価

教員１人１台タブレット端末の配備と学習系インターネット通信の高速化を実現し、ＩＣＴを活用した授業実践の環境基盤を整えた。また、全小学校に対して学校訪問を実施するこ

とで、各校の実態に合わせた情報活用能力の観点別到達目標の策定を進めている。

◆今後の方向性

【継続】児童生徒がＩＣＴ機器を活用しながら情報活用能力を育む授業を実現できるよう、ニーズに合わせた研修会を行うとともに、教員経験者や指導主事による相談・助言を引き続き実施する。

２．プログラミング教育推進のための教職員研修

実施状況	実績・成果
小学校におけるプログラミング教育の見直し よりプログラミング的思考力の育成につながるよう四日市版カリキュラム※2の見直し・改定	小学校６年生で行う授業内容を改定し、指導案も作成
プログラミング教育研修の実施	１回実施。Scratch を用いたはじめてのプログミラング指導について、体験を交えた内容で実施

◆評価

小学校６年生の内容について、小学校５年生までの積み重ねをより意識して Scratch を利用した指導内容に改定した。小学校カリキュラムにおいてプログラミングの機会を増やすことで、中学校技術科の学習指導を円滑に実施できるようになると考える。改定した内容を周知し、実際の指導につなげていくことが求められる。

◆今後の方向性

【継続】論理的思考力を高めるための授業づくりへとつながるよう、改定した四日市版カリキュラムをもとに各校で取組を進める。なお、夏季研修講座で実施するプログラミング教育研修も改訂に沿って内容をより充実させる。

※２　小学校におけるプログラミング教育を発達段階に応じた指導内容を示した四日市市独自のカリキュラム。

３．情報モラル教育の充実

実施状況	実績・成果
デジタル・シティズンシップ教育の教職員研修の実施	教員スキルアップ研修の１つとして、講師を招聘してオンラインにて実施
ネットモラル・セキュリティ研修の実施	タブレット端末に導入している情報モラル教材を用いてセキュリティに関する知識、具体的な指導方法についての研修会を１回実施

◆評価

スキルアップ研修として、市内小学校にデジタル・シティズンシップエデュケーターを講師として招き、ＩＣＴのよき使い手・よき社会の担い手へと育てるために指導上のポイントなどをご教授いただいた。予定していた師範授業は天候の都合で行えず、急遽オンラインによる講演となった。今後は具体的な授業指導を直接学ぶ機会を設けていく。

◆今後の方向性

【継続】情報技術に関連する人的、文化的、社会的諸問題を理解し、法的・倫理的にふるまうための能力とスキルを育成するために研修会等を実施し、引き続きデジタル・シティズンシップ教育の推進を図る。

3　言語活動の充実による読解力・表現力の育成

＜めざす子どもの姿＞
文章を正確に理解し、相手に適切に伝えることができる子ども

言語は、知的活動やコミュニケーション、感性・情緒の基盤として、生涯を通じて個人の自己形成に大きく関わります。そのため、教育課程全体を通じて、学習や生活の基盤となる読解力・表現力等の言語能力を育成していく必要があります。
そこで、読解力向上について重点的に指導するとともに、学校教育活動全体で読む・話す・書くといった言語活動の充実を図り、「文章を正確に理解し、適切に表現する資質・能力」を育成します。

◆指標とその評価

指標	基準値 R１	R４	R５	R６	R７	R８	目標値	R４ 評価
「全国学力・学習状況調査」における読解力に関連する問題の平均値	小学校 100.7 中学校 101.1	小学校 98.6 中学校 100.1					小学校 102 中学校 103	↘

【評価】

令和元年度と比較し、小学校は 2.1、中学校は 1.0 減少している。小中学校ともに、場面の展開、登場人物の行動や心情の変化等について、叙述や描写を基に捉えることに課題がみられた。

◆具体的な施策の現状

１．読解力を高める授業づくりの推進

実施状況	実績・成果
読解力を育む『２０の観点』※1の活用 国語科を中心とした、教科横断的な読解力、表現力向上を意識した授業づくりの推進	＜読解力向上推進校＞ 中央小、港中 ・読解力向上推進会議を１回開催 ・推進校の取組をリーフレットで周知 ・小学校高学年用「読解力を育む２０の観点ワークシート」配付及び中学校用「読解力向上ワークシート」配付

◆評価

推進校では、国語科を中心に全教科の中で読解力向上を意識した取組を進めた。また、ワークシートの効果的な活用方法も検証し、各校の実践を読解力向上推進会議で共有した。推進校での取組はリーフレットにまとめ、市内小中学校教員へ配付し授業づくりへの活用を図った。

◆今後の方向性

【継続】これまでの取組を継続するとともに、推進校の実践を各校に発信し、学校の読解力向上を目指した取組の支援を行う。また、中学校３年生を対象にした「リテラス論理言語力

検定」※2を実施し、社会で活躍するために必要な言語能力として振り返らせることにより、子どもたちのキャリア形成に役立てるとともに、学校が授業改善の一つの指標として活用できるように研修会を行う。

※１「文章を正確に理解する資質・能力」を育むための指導のポイントを２０の観点で示したもの。どの学年のどの教材でどんな資質・能力を育むのかを示している。

※２　社会で活躍するために必要な言語能力を「語彙運用力」「情報理解力」「社会理解力」という３つの領域で測定するもの。

２．子どもが思いや考えを出せる場の設定

実施状況	実績・成果
中学生スピーチコンテスト「THE BENRON」の開催	・中学生スピーチコンテスト「THE BENRON」のスピーチ動画を、四日市市学習ポータルサイト「こにゅうどうくん学びの部屋」に掲載 ・「THE BENRON」のスピーチ原稿を冊子にし、市内小中学校及び関係各所に配付

◆評価

小中学校で育成した言語能力を生かして自分の考えを主張する中学生スピーチコンテスト「THE BENRON」を開催し、自分の思いや考えを発表する場とした。また出場した中学生のスピーチ動画を「こにゅうどうくん学びの部屋」に掲載し、市内小中学生がよりよい表現について学ぶことができるようにした。

◆今後の方向性

【継続】各教科や総合的な学習の時間の中で学んだことを発表する場において、自らの経験や体験を踏まえ、根拠を示しながら考えや思いを伝えるとともに、聞き手が聞きたくなるような表現の工夫をしている子どもたちの姿や実践を、市内小中学校に紹介していく。その１つとして、中学生スピーチコンテスト「THE BENRON」を継続して開催し、子どもたちが筋道立てて文章を構成し、自分の考えや思いを豊かに表現する場として位置付けていく。

4　筋道立てて説明できる論理的思考力の育成

＜めざす子どもの姿＞
根拠に基づいて論理的に考え、簡潔・明瞭・的確に表現する子ども

ＡＩ技術の発達により、定型的業務や数値的に表現可能な業務は、人工知能により代替が可能な社会になるといわれています。そのような社会で生きる子どもたちには、「文章や情報を正確に読み解き対話する力」「科学的に思考・吟味し活用する力」「価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力」といった学習の基盤となる資質能力を育成することが必要です。

そこで、子どもたちが学校で学んだことを、実社会と結び付けて課題を解決することができるよう、問題解決的な学習を通じて、論理的に思考し活用する力を育成します。

◆指標とその評価

指標	基準値 Ｒ１	Ｒ４	Ｒ５	Ｒ６	Ｒ７	Ｒ８	目標値	Ｒ４ 評価
「全国学力・学習状況調査」における思考力に関連する問題の平均値	小学校 95.3 中学校 104.3	小学校 99.0 中学校 103.6					小学校 101 中学校 105	↗↘

【評価】

令和元年度と比較し、小学校は 3.7 増加し、中学校は 0.7 減少している。中学校では、問題解決の根拠を筋道立てて説明する力は身に付いてきたが、その問題の条件を変えるなど発展的に考え説明することに課題がみられた。

◆具体的な施策の現状

１．子どもたちの論理的思考力の向上を意識した授業づくりの推進

実施状況	実績・成果
問題解決的な学習の中で、「考えるための技法（思考スキル）※」を意識し、「課題づくり」「思考ツール」「表現モデル」を活用した授業づくりの推進	＜論理的思考力向上推進校＞ 山手中・高花平小 ・推進校における研究授業を２回実施 ・論理的思考力向上推進会議を１回実施 ・取組実践を「論理的思考力育成のための手引き」にまとめ、市内小中学校に配付

◆評価

令和４年度は、推進校での研究を算数・数学だけに限らず、全教科での取組に広げ、教科横断的な学習の中で実践を進めた。その実践を「論理的思考力育成のための手引き」に論理的思考力の向上を意識した授業づくりの視点を示すとともに、動画で視聴できるよう二次元コードを掲載することで、各校の授業改善の取組をより推進することができた。

◆今後の方向性

【継続・拡充】これまでの取組を継続するとともに、各学年で身に付けたい思考スキルを発達段階で整理し、系統的なものとなるようにすることで、各教科で思考スキルを意識した授業づくりを推進する。

※　考える際に必要になる情報の処理方法を「比較する」、「分類する」、「関連付ける」などのように具体化し、技法として整理したもの

5　英語コミュニケーション能力の育成

＜めざす子どもの姿＞
多様な価値観や文化の中で、英語で考えを伝えることができる子ども

経済、社会、文化等の様々な面でグローバル化が進展し、国際協調の必要性が一層高まる中、これからの社会において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが予想されます。
そのために、就学前から英語に出会い、「聞く」「読む」「話す（発表・やり取り）」「書く」の４技能５領域を統合した言語活動を通して、発達段階に応じた英語コミュニケーション能力の育成を図り、自分の思いや考えを英語で伝えることができる力を育成します。

◆指標とその評価

指標	基準値 R１	R４	R５	R６	R７	R８	目標値	R４評価
①「英語を使って友だちと会話することは楽しい」と肯定的な回答をした小学５・６年生の割合	82%	84%					90%	↗
②CEFR A1 レベル（英検３級）相当以上を取得している及び相当の英語力を有すると思われる中学３年生の割合	44.3%	47.0%					55%	↗

【評価】

言語活動の充実により、授業の中で自分の考えや思いを表現する場面が増えたことで、英語でのコミュニケーション力の素地が身に付いてきていると考えられる。

◆具体的な施策の現状

１．英語コミュニケーション能力を高めるための環境づくり・指導体制の確立

実施状況	実績・成果
全小中学校への英語指導員の派遣	・小学校 36 校にＨＥＦ※1、小学校１校および中学校 22 校にＹＥＦ※2を派遣。大規模校 10 校にはＹＥＦが常駐。
小学生対象に「英語キャンプ」を実施	小学生 41 人参加
中学校で英検ＩＢＡの実施	市内中学校において、全学年で実施

◆評価

＜小学校＞

外国語担当教員とＨＥＦによる授業を１・２年生で年間３時間、３・４年生で年間９時間、５・６年生で年間 18 時間程度実施し、児童が授業内外でネイティブスピーカーの英語に触れる場面を作ることができた。また、より専門的に英語を学ぶことができる機会として、三浜文化会館において、集合型で「英語キャンプ」を実施することができた。

＜中学校＞

ＹＥＦ16名を全22中学校に配置し、そのうち、規模が大きい中学校10校には常駐させることで、ＹＥＦが授業を行う時間数を確保することができた。授業では生きた英語を使った言語活動が充実し、生徒が自分の考えや気持ちを表現する機会が増えた。

令和４年度も、すべての学年で英検ＩＢＡを実施し、「聞くこと」「読むこと」の英語力を測定することで、学習の成果の確認や今後の目標設定など、一定の基準をもって生徒の学習を支援することができた。分野別平均正答率においては、全ての学年で「読解」が昨年度より高くなっており、英語の授業でＹＥＦとの実践的な言語活動が行われていることが、成果につながったと考えられる。

◆今後の方向性

【継続】小中学校へＨＥＦ、ＹＥＦを派遣し、児童生徒が生きた英語に触れる機会を確保していく。中学校では、全学年で英検ＩＢＡを実施し、グローバル化に対応できる英語力を測定し、学習の成果や目標設定をすることで、英語力の向上を目指す。

※１　Haken　English　Fellowの略。本市で直接雇用していない英語指導員のこと。派遣業者から派遣している。

※２　Yokkaichi　English　Fellow の略。本市で直接雇用している英語指導員のこと。姉妹都市提携をしているアメリカのロングビーチ市出身の英語指導員と国の「語学指導等を行う外国青年招致事業（JET プログラム）」により採用している英語指導員を派遣している。

２.「英語で地域発信！」する活動の推進

実施状況	実績・成果
「故郷よっかいちプロジェクト」の推進	・小学６年生対象にあすなろう鉄道・三岐鉄道プロジェクトを実施 ・中学校では１・２年生で四日市を紹介する文でパフォーマンステストを実施
ＩＣＴを活用した学習による国際交流	２中学校が姉妹都市ロングビーチ市内の学校等とオンラインで交流

◆評価

＜小学校＞

小学校６年生が、あすなろう鉄道・三岐鉄道沿線の施設について英語でアナウンスをする取組を、あすなろう四日市駅、三岐鉄道富田駅、平津駅で行い、13校が参加した。

＜中学校＞

自分たちの故郷を英語で紹介することを目的とした、「四日市プロジェクト」を行うことで、定型文を授業練習し、さらにオリジナルの内容を加えて、発展的に学習することができた。また、全22中学校において、市内共通のパフォーマンステストを実施した。

令和４年度も姉妹都市であるロングビーチの Rogers　Middle　School と西笹川中学校が、また Stanford　Middle　School と橋北中学校がオンラインで交流を行った。生徒たちは自己紹介や四日市の魅力について英語で伝えることができていた。

◆今後の方向性

【継続】小学校ではあすなろう鉄道・三岐鉄道プロジェクトを、中学校では四日市プロジェクト、ロングビーチとの交流を行い、児童生徒の英語で地域発信する力を育てる。

6　就学前教育の充実

＜めざす子どもの姿＞
遊びから生きる力を学ぶ子ども　豊かな心と丈夫な身体を持つ子ども
豊かなかかわりあいをもてる子ども

幼児が安心感と信頼感を持ち、身近な環境に関わり、自信をもって活動できるようにすることで、一人一人の幼児の発達を促します。さらに、充実感や満足感を十分に味わえるような環境を構成し、主体的な遊びを通しての「学び」の充実を図ります。
また、「知識、技能の基礎」「思考力、判断力、表現力などの基礎」「学びに向かう力、人間性等」の「資質、能力」を育むことを意識し、小学校教育との円滑な接続を図ります。

◆指標とその評価

指標	基準値 R１	R４	R５	R６	R７	R８	目標値	R４ 評価
「主体的な遊びを通しての学び」について研修を行い、教育課程に反映させた園の割合	―	69%					100%	―

【評価】

計画・実践・評価のサイクルを確立させた研修の積み上げと、研修効果を上げるために三重大学連携など外部講師の助言を受けるなど、69%の園が年３回以上の研修を行い、研修で得たことを教育課程に反映させることができた。

◆具体的な施策の現状

１．幼児期にふさわしい経験・体験の充実

実施状況	実績・成果
こども芸術体験事業の実施 オンラインを活用して、プロの楽団の演奏を自園で視聴 	・全園にオンライン配信 ・年３回実施
各園の特色を生かした経験・体験活動 自園の特色を生かして、子ども達に合った体験を実施	・外部より講師を招いた体験活動（９園） 例：多文化共生教育としてゴスペルの鑑賞会 プロバスケット選手と体を動かして楽しむ

◆評価

コロナ禍のため、楽団の演奏をオンライン配信で視聴した。楽器の説明を演奏の間に加えてもらったことで、楽器に興味を示した。また、その後の合奏の取組につながった。オンライン視聴は初めての試みであったが、各園が視聴方法を工夫して演奏を聴くことができた。

◆今後の方向性

【継続】就学前では、五感を刺激するような直接的な経験・体験が重要である。毎日の保育内容の充実はもとより、外部講師による新たな体験を各園の実態に合わせて取り入れたり、ＩＣＴ機器も必要に応じて取り入れて実施したりできるよう支援する。

２．遊びを通した学びの研修・研究の推進

実施状況	実績・成果
○令和５年度にこども園の３歳児１号認定受入れ開始に向け、３歳児保育ビデオを活用した研修 ○子どもの遊ぶ姿の動画を活用した園内研修やグループ研修を実施 ○運動会や発表会の取組過程をタブレット端末で撮影し、その後の取組での活用	・ステージⅠ～Ⅲ研修を年２回 ・動画を活用した研修（８園） ・行事でのＩＣＴの有効活用（１園）

◆評価

動画や写真を活用したことで、研修の参加者が同じ子どもの遊びの場面を共有しながら話し合いを行うことができた。

各園にタブレット端末が２台配備されたことにより、オンライン研修会に無理なく参加できるようになり、グループ研修をオンラインで行うことで、多くの職員が動画を視聴しながら研修会に参加することできた。

◆今後の方向性

【継続・深化】令和５年度は、幼児教育センターが開設するため、情報機器を活用しながら、様々な研修体制により受講が可能となる。職員の質の向上をめざし、動画やドキュメンテーションを使った研修など、研修内容の充実と工夫を図るとともに、それを継続するための職員体制の工夫を検討していく。

３．家庭・地域との連携

実施状況	実績・成果
地域と連携した取組 レストランごっこ、鯨船など **学びの一体化における幼こ保小中の連携** 走り方指導、絵本読み聞かせ、野菜の栽培収穫など	・地域との連携（４園） ・学びの一体化での連携（15園）

◆評価

地域や学びの一体化で連携することにより、園児の豊かな体験を保障することができ、コミュニケーション能力の育成やキャリア教育につなげることができた。

◆今後の方向性

【継続】保育者の援助の下で園児が主体性を発揮して活動に取り組むことができるように、幼児の姿を捉え発達に必要な体験ができるよう支援していく。